

# シカゴ万博（一八九三）と黒人女性

——アイダ・B・ウェルズとフアニー・B・ウィリアムズの場合——

岩 本 裕 子

## 一 はじめに

一九九二年は、コロンブス（Christopher Columbus）が、北米大陸のバハマ諸島の一つ（彼はそこをサンサルバドル島と命名した。）に到着した一四九二年から丁度五百年目にあたった。セビリア万国博覧会、バルセロナ・オリンピックに代表される記念行事、シンポジウム、あるいは関連行事が、世界各地で行われた。到着日の十月十二日を記念して、合衆国では十月第二月曜日を「コロンブス・デー」（Columbus Day）<sup>(1)</sup>として、連邦法定祝日と制定している。

ヨーロッパ人にとっての地理上の「発見」は、アメリカ大陸先住民にとっては、決して歓迎された事実ではなかったはずだ。<sup>(2)</sup>しかし、百年前の四百周年の年には、合衆国ではどの様に捉えていたのだろうか。「発見」という言葉に何の疑問も持たず、白人達は自らの国家の繁栄を謳歌していた。「アメリカ発見四百年記念」をお祭騒ぎとして祝い、シカゴ（Chicago, Ill.）での万国博覧会を企画した。その呼び名は、コロンブスの名にちなんだ世界コロンビア博覧会（the World's Columbian Exposition）とか、シカゴ万国博覧会（the Chicago World Fair）などとされた。本稿ではシカゴ万博、あるいは万博と略記する。

この万博と同時代の黒人女性との接点を検討することが本稿の目的である。一九世紀末における黒人女性の状況を考察する

上で、シカゴ万博との関わりは重要な意味を持つと思われる。彼女達にとって大きな転換点となる、全米組織設立への誘因ともなるためである。すでに、合衆国の歴史研究者の間では、シカゴ万博と黒人との関係を考察する研究業績がある。しかし、日本では、黒人史研究はかなり進んだ分野ながら、黒人女性史は始まったばかりの状態<sup>(3)</sup>で、特にこのシカゴ万博との接点を考察した論考は見当たらない。

万博と黒人男性との関係は、ラドウィック (Elliot M. Rudwick) とマイヤー (August Meier) によって、一九六五年に共同論文が発表されている。<sup>(4)</sup> 万博開催前後の新聞、特に黒人新聞の記事を史料として、シカゴ万博において、当時の黒人(男女共に)がどのような立場にあったかを、簡潔ながら要領よくまとめ、全体像を描き出している。この論文から、九年後の一九七四年に、黒人女性研究者マッサ (Ann Massa) によって万博における黒人女性の立場を考察する論文が発表された。<sup>(5)</sup> マッサの問題意識は、彼女の言葉によれば、ラドウィック達と同様、万博との関わり方を検討し、評価することである。しかし、その対象を黒人女性及び関わった白人女性とした点が特徴である。史料は黒人新聞以外に、女性達の書簡集、委員会の議事録など、豊富な一次史料を駆使し、丁寧すぎる程に個々の問題に触れ、詳細な検討がなされている。

これらの研究業績を踏まえて、本稿では、同時代の黒人女性知識人の中から、二人を選択し、彼女達を通してシカゴ万博を検討したい。その二人とはアイダ・B・ウェルズ (Ida B. Wells: 1862-1931)<sup>(6)</sup> とフannie・B・ウィリアムズ (Fannie Barrier Williams: 1855-1944) である。同時代にシカゴで活躍したという共通点を持ちながら、生い立ち、生活環境、それに伴う経験などが対照的に異なるこの二人の言動を検討することで、一九世紀末の黒人女性達の運動の原点を考察したいと思う。

## 二 シカゴ万博と女性・黒人

### (1) シカゴ万国博覧会(一八九三)

南北戦争終了後、アメリカ合衆国は急激に工業化し、一八六〇年から四十年間で、工業投資額を十二倍に、年工業生産額を六倍に増やし、世界一の工業国となった。産業発展に伴い、都市も急速に拡大し、一八六〇年に人口の二〇％に過ぎなかった都市人口（人口二五〇〇人以上）は、一九〇〇年には四〇％に達していた。こうした一九世紀後半のアメリカ合衆国の高度成長を象徴する都市として、シカゴが挙げられる。

シカゴは一八三三年には人口約二百人の町で、中西部の先住民インディアンを相手にした交易地であった。それが、運河の開設、鉄道の建設などによって農産物の集散地から、東西の接合点となり、さらに農業機械製造や食肉工業などによる工業都市へと発展した。南北戦争直後には人口三十万都市となり、一九〇〇年には人口一七〇万人と増加し、ニューヨーク（New York, N. Y.）に次ぐ合衆国第二の大都市となった。国内外に自らの巨大な生産力を誇示しようとした世紀の祭典、万国博覧会の開催地としてシカゴが選ばれたことは、アメリカ経済発展を反映する地として当然のことであつたろう。

シカゴ万博の中心テーマは、「科学技術の発展と工業への応用」であつた。「新世界発見」四百周年祝賀の祭典として、一八九二年に開幕の予定が、パビリオン建設の遅れから、正式な開幕は翌年五月一日となった。しかし、不完全な建設中の会場ながら、九二年十月二三日に、十万人の見物人を集め、ジャクソン広場（Jackson Park）で仮の開幕式が行われた。モートン副大統領（Levi Morton）は「この会場の建築物を人類に捧げる。」と演説した。視覚芸術の宮殿（the Palace of Fine Arts）から水産業館（the Fisheries Building）までの全ての建築物が、人類の英知を集めて建設され、当時の合衆国の繁栄を代表していた。

仮開幕の時点で、すでに見物人の耳目をひいた呼び物が二つあつた。一つは発明家フェリス（George W. G. Ferris）によって作られた大観覧車（the Ferris wheel）だった。直径が七六メートルで、三六個の展望車をつけ、最上位置からは会場の全ての建物が見渡せた。もう一つの呼び物は「小さなエジプト」（“Little Egypt”）と呼ばれる踊り子だった。自称ペルシヤ出身の彼女は、絹のズボンを履き、両手に持つハンカチを振って、身体をくねらせながら挑発的に踊る姿は、見物人の女性

達にとって大変な衝撃であつた。<sup>(7)</sup>

仮開幕からすでに半年が過ぎ、何百万人もの訪問者を記録していた万博であつたが、正式な開幕式は、九三年五月に催された。政権交替により合衆国史上例のない二度目の当選を果たした民主党クリーヴランド大統領 (Grover Cleveland) は、会場に集う聴衆の前で、豪華な紫色の箱に入った電気のスイッチを押した。その途端、大噴水から水が噴き出し、合衆国国旗が掲揚され、自由の女神像にかけられた垂幕が外された。<sup>(8)</sup> 会場には古代ギリシャ様式のきらきら輝く白い建物が立ち並び、その一郭は「白い都市」<sup>ホワイトシティ</sup>と命名された。ワスプ (WASP) 文明の繁栄を宣伝する万博であつたことを考えると、もっともな名称ではあつたが、これにより、傷つく人々のことは後に論じる。

シカゴ万博は九三年十月三十日で閉幕した。実質一年以上続いた博覧会の興行収益として、シカゴには入場料金だけでも五十万ドル入ったとされる。ところが、延べ二七万人と言われる訪問客に白い都市を印象づけたこの会場で、閉幕後の九四年一月八日に火災が発生し、二百万ドルの損害を出した。合衆国の発明品の陳列箱と言われた美しい白い都市は、もはや跡形もなく消えてしまった。

しかし人々の心には、コロンブスの航海に使われた三隻の帆船のレプリカ、ヤーキーズの大望遠鏡、ニューヨークと結んだ長距離電話、動く歩道など、数々の驚異的な展示物の思い出が残った。ただ、この思い出が「もう一つのシカゴ」に過ぎないことに、多くの訪問者達は気づいていなかった。工業都市シカゴは、同時に労働者の町であり、テナメント (tenement) と呼ばれる賃貸アパートや小住宅 (cottage) が密集する労働者居住区スラム街 (slum) の存在があるにも拘わらず、訪問者達は無縁の一空間だけを訪れたに過ぎなかった。<sup>(9)</sup> 一八八六年のヘイマーケット事件 (Haymarket Affair) や万博開催中の九三年の恐慌が引金で、九四年六月に起こったプルマンストライキ (Pullman Strike) の舞台がシカゴであることを忘れてはならない。

万博主催者にとっては、国内外に、合衆国自らの巨大な生産力、繁栄を誇示するという目的を、十分達成できた行事となっ

たこともまた事実であった。この繁栄は、ワスプに代表される合衆国白人にとってという限定が必要である。但し、同じ白人でありながらスラムに住む労働者達、またその他にも、忘れられた存在、無視された存在があったことに関して、次節から論じたい。

(2) 参加できた女性・参加できなかった黒人

コロンブス到着の犠牲となったアメリカ大陸先住民にとっての、シカゴ万博のことはすでに触れた。では、性、人種を問わない合衆国民全体にとっては、どのような万博であったのだろうか。国民なら誰でも訪れ、見学することができたこの万博も、全員が展示に参加することができた万博ではなかった。

シカゴ万博開催が、合衆国連邦政府から正式に承認され、運営資金の一部は、議会承認の政府支出金が当てられることも決定した。一八九〇年にはハリソン大統領 (Benjamin Harrison) によって、全州及び全准州の代表者によって構成される全米規模の世界コロンビア委員会 (the World's Columbian Commission, 以下、万博委員会と略記。) が組織された。万博委員会設立時点からすでに明白だったことは、この万博委員会が「純粋な白人」(simon-pure) によってのみ構成され、「黒人排斥」(lily-white) の立場を取ったことだった。<sup>(10)</sup> 人種差別を公にした万博委員会も、性差別は避けたようで、万博委員会は最初から、女性館 (the Women's Building) 設立案を出していた。万博委員会の真意は明らかではないが、事実上、女性だけの参加で、企画も設計も全て女性によってなされる空間を、女性は獲得した。

奴隷解放宣言から三十年近く経ち、世代交替の始まっていた当時、黒人達は、この万博を自分達の業績を示す好機であると確信していた。しかし政府は、会場での召し使的な仕事以外から黒人を全く締め出して、公式参加については拒否した。黒人達は政府の決定を承認できず、参加要望の運動を起こした。全米黒人協議会 (the National Convention of Colored Men) や黒人新聞協会 (the Afro-American Press Association) は、黒人を万博委員会のメンバーに加えるよう、大統領を熱心に

説得した。しかしこれまでホワイトハウスによって長く無視され続けたという黒人達の屈辱は、ここでも同様で、事態は全く前進しなかった。

一八九一年五月になってハリソン大統領が、ある黒人団体に好意的な姿勢を見せ、参加の機会が得られるかと思われたが、結局、全ての会場配置が決定し、会場にもはや余地なしという回答であった。<sup>(11)</sup> 開催後、「白い都市」を訪れた黒人達は、「偉大なアメリカの白い象」とか「白いアメリカの世界博覧会」と呼び、失望と幻滅を感じた。絶望的な状況の中、黒人達がどの様に立ち向かったかについては、後に述べる。

黒人のような努力の必要もなく、女性館の参加は決定し、その経過は、次のようだった。シカゴの不動産王パーマー (Potter Palmer) が、二十万ドル近くを出資し、彼の妻を女性館設立委員会 (the Board of Lady Managers, 以下、女性委員会と略記。) の委員長とし、計画を実行した。パーマー委員長 (Bertha Palmer) は、ケンタッキー (Kentucky) 出身で、シカゴ社交界では花形の白人女性であった。この女性委員会は、九人のシカゴ在住の女性と、各州及び各准州から二人の女性メンバーと二人の女性代理人によって構成された。万博委員会は、女性委員会に全権委任し、万博に関係することで女性または女性組織に関することならば、全て女性委員会を通して行うこととなった。九〇年十一月一九日～二六日の予定で、最初の女性委員会が開かれようとしていた。<sup>(12)</sup>

女性は参加でき、黒人は参加できなかった万博で、両者に属する黒人女性はどうであったろうか。黒人の立場での参加の道は断たれたが、女性の立場ではどの様な立場に立ったのだろうか。女性館への黒人女性の参加をめぐっては、第三章第一節で、また、参加の道の断たれたところに道をつけようとした黒人女性については第三章第三節で、詳細に述べたい。

### (3) シカゴで生きる二人の黒人女性

黒人の立場と女性の立場と、各々に異なりながらもこの万博における差別や排斥に立ち向かった黒人女性二人の経歴を述べ

よう。但し、万博に関わるまでの半生に限り、万博以降については他稿に譲りたい。

二〇世紀転換期を生きた知識階級の黒人女性の中でも、女性としての立場を強調した女性は、個人レベルから組織レベルまで多く存在し、彼女達の多くが、主に北部で活躍した。<sup>(18)</sup>中でも本稿では、シカゴ在住の黒人女性で、万博と深く関わったファニー・B・ウィリアムズを取り上げたい。

彼女は、ニューヨーク州のロチェスター (Rochester, N. Y.) に近い小さな田舎町のブロックポート (Brockport, N. Y.) で一八五五年に生まれた。二女一男の子供の一人であった。彼女の家族は、長い間、町で唯一の黒人家庭だった。父親 (Anthony J. Barrier) は、ファイブデルフィア生まれで子供の頃に引越して来た自由黒人だった。母 (Harriet Prince Barrier) はニューヨーク州生まれで、同様に自由黒人であった。散髪屋や炭坑夫として真面目に働く父は、教会では指導的役割を果たし、地域でも尊敬されていた。

地元の学校を一八七〇年に卒業したウィリアムズは、ボストン (Boston, Mass.) やワシントン D. C. (Washington D. C.) で音楽や芸術を学んだ。さらに数年間、南部で教職に就いている。この南部での経験が、後の彼女の黒人女性としての意識に、大きく影響を与えている。黒人女性であるために差別された経験のなかった彼女にとって、南部で目の当たりにした再建後の南部黒人の状況は、衝撃であった。誰よりも黒人女性が、南部では「誤解され、道徳的に欠陥があると悪評され、しばしば憎まれてさえいる」現実を知った時の、彼女のショックと苦痛は、筆舌に尽くし難く「簡単には立ち直れなかった。」と後に語っている。<sup>(14)</sup>

八七年に故郷で、ジョージア州出身の弁護士レイニング・ウィリアムズ (S. Laing Williams) と結婚した彼女は、シカゴで暮らし始める。法律事務所を構える夫の仕事を手伝いながら、シカゴの黒人社会のリーダー的な役割を担う夫婦となる。九五年にはシカゴ女性クラブ (the Chicago Woman's Club) の唯一の黒人女性に選ばれたり、夫の死後、一九二四年にはシカゴ図書館委員会 (the Chicago Library Board) の最初の女性委員になるなど、シカゴの白人社会でも先駆的な活動をした。子

供には恵まれないままに、大都市シカゴの社会福祉の仕事を経験的に<sup>(15)</sup>行い、生涯をシカゴで過ごした。

女性の立場を強調して活動したウィリアムズに比べて、女性としての立場も含めつつ、むしろ人種としての黒人の立場からその活動を行った黒人女性アイダ・B・ウェルズについて述べよう。彼女は、一八六二年南部ミシシッピ州ホーリスプリングス(Holly Springs, Miss.)の農園で、奴隷の子として生まれた。十四歳で両親を亡くして以来、弟妹達を育てるために、教職の傍ら、新聞に投稿することで生計を立てていた。大学教育を修了する機会もなかったウェルズだが、厳格な両親のしつけと、不正を許さない正義感の持ち主という性格から、彼女の記事は黒人新聞で人気を集めていた。

南部再建後の黒人の抵抗の声としての役割を持つ、自らの新聞『フリー・スピーチ』(the Free Speech and Headlight)に黒人の権利獲得について、記事を書き続けた。彼女の人生の分岐点となったのは、一八九二年に親友の黒人男性を南部白人によるリンチで失った事件だった。彼女のペンは怒りに燃え、殺害者達の有罪判決を要求する記事を書いたが、実現するはずもないままに、彼女自身が暴徒の焼討ちに遭い、命からがら南部から逃げ出した。二度と南部に戻ることもなく、ニューヨークからイギリスへと反リンチ運動の講演を続け、万博がきっかけとなり、シカゴでも活動をする<sup>(16)</sup>。

万博終了後の一八九五年に彼女は結婚し、以後シカゴで生涯を過ごす。夫フェルディナンド・バーネット(Ferdinand Lee Barnett)は、シカゴ在住の弁護士で、黒人新聞『コンサーベーター』(the Chicago Conservator)の編集者でもあった。二人の男児を抱える寡夫との結婚で、ウェルズは二児の母として結婚生活を始め、彼女自身にも二男二女の子供が生まれる<sup>(17)</sup>。ウィリアムズ夫妻同様、バーネット夫妻もシカゴの黒人社会でのリーダー的存在であった。二人の夫は、同じ法律事務所と一緒に仕事をしたこともあり、両夫婦の接点も多かった。

しかし、その活動内容の相違から、二組の夫婦は対照的であるとの評価を受けることが多い。黒人史の中でも「どん底時代」(“the nadir”)とされる一九世紀末に、黒人解放運動の指導者として登場したブッカー・T・ワシントン(Booker T. Washington)は、職業教育に徹した自助思想を南部黒人に説いた。彼の思想に対する評価を比較すると、両夫婦の相違は明



らかとなる。ウィリアムズ夫妻は早い時期からワシントンの支持者として、個人的な友人関係を保っていた。二〇世紀転換期のシカゴにおいて、ワシントンの最も親密な友人として援助していた。夫は、奴隷制時代以来の偉大な黒人指導者フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass) の伝記を、ワシントンのためにゴーストライターとして執筆してもいる。妻ウィリアムズも、一九〇〇年以降、熱烈なワシントン支持者となり、黒人の実業教育のための努力を高く評価するようになる<sup>(18)</sup>。

他方、バーネット夫妻は、結婚以前から別々にワシントン批判の立場を取っていて、ワシントンには邪魔な存在であったと言える。白人との融和策を説き、白人への順応と服従という「妥協的な」態度を取り続けるワシントンに対し、結婚後は夫婦で新聞や講演の中で批判していく。時に、バーネット夫妻は「戦闘的」「非妥協的」との評価を受ける程だった。黒人を二級ではなく一級市民として、アメリカ社会で認められることを主張し続けた<sup>(19)</sup>。シカゴに生きるこれら二人の黒人女性、あるいは彼女達夫婦が、万博との関わりを通して追求したものを、その言動から検討したい。

### 三 ウェルズとウィリアムズに見る黒人女性の主張

#### (1) 黒人女性と「女性館」

一八九〇年十一月十九日からの第一回女性委員会開催を目前にして、『トリビューン』紙 (the Chicago Tribune) に女性委員会開催の記事が掲載された。また、黒人女性の参加をめぐって期間中に議論されることも予告された。黒人女性達は、地元の有力者ローガン未亡人 (Mary S. Logan) に働きかけ、参加に向けての運動を依頼した。ローガン夫人の亡夫は、黒人解放のためのイリノイの三偉人 (リンカンを含む。) の一人と言われ、黒人の地位向上に尽力した白人で、夫人も同様の意識を持つ白人女性だった<sup>(20)</sup>。

ローガン夫人の尽力にも拘わらず、黒人女性の女性館への参加問題は、難航した。パーマー委員長からローガン夫人への九

一年十月付けの私信で、「黒人女性からの反目には、もううんざりしている。ローガン夫人からフレデリック・ダグラス氏に話してもらえないだろうか。」と書いている。また十一月には、ハリソン大統領の娘で、女性委員会のメンバーでもあるラッセル(Russell B. Harrison)宛の私信で、「大統領から黒人女性に話してほしい。」などとも書き送っている。<sup>(21)</sup>

万博開催に向けて、政府公認の女性委員会以外に、女性による準備団体が作られる。女性コロンビア協会(the Woman's Columbian Association)と女性コロンビア補助協会(the Woman's Columbian Auxiliary Association)と、名称は似ていて、両者ともイリノイ州公認の団体であった。しかし、その立場は大変異なり、ライバル団体とも言えた。黒人女性の参加に積極的な働きかけをしたのは後者で、ブーン会長(R. D. Boone)は、合衆国における黒人の業績を列举し、女性館への黒人女性参加の依頼状を女性委員会宛てに提出した。<sup>(22)</sup> 補助協会は、女性会員ばかりではなく、七人の男性会員の助言者を含んでいた。その一人に、ウエルズの夫となるバーネットがいた。女性館への参加のための運動は活動の二次的な目的で、補助協会の本来の目的は、黒人の人種としての可能性を世界に証明する機会の万博と把握して、そのための活動を行うことだった。<sup>(23)</sup>

ブーン会長の依頼状を女性委員会のメンバーの大半が無視した。白人女性からの反対意見は、二通りに分かれた。問題になったのは、女性館における展示方法で、一つは、白人女性とは全く分かれて展示するという提案、もう一つは、差別しないで黒人女性も展示をするが、女性館ではなく、彼女達が個々に属している黒人グループでの展示を提案した。<sup>(24)</sup> 第二の提案は、差別しないとは言いながら、現状認識が不十分で、女性館で拒否された場合、黒人女性の参加の道は絶たれることを理解していない。第一提案は、女性コロンビア協会のトレント会長(Lettie Trent)による妥協策であった。しかし、シカゴ在住の黒人女性達は納得せず、ブーン会長はトレント会長のB・T・ワシントンの融和策を批判し、抵抗した。<sup>(25)</sup>

結局、女性委員会の構成メンバーから黒人女性は締め出され、黒人女性の要求を女性委員会は無視した。さらに、「黒人を代表して」という名目で、ケンタッキー出身の白人女性、メアリ・カントリル(Mary C. Cantrell)がメンバーとなった。九月に、カントリルは代表している黒人女性の活動報告をする。内容は簡単で、「黒人女性は全国規模の組織を持ってい

ない。万博参加の条件を満たしていないため、今回は見送ったほうがよい。」と言うことであった。黒人女性側からの対応として、さらにオハイオ州 (Ohio) の大学教員で黒人女性のハリー・ブラウン (Hallie Quinn Brown) から、女性委員会宛て九二年四月八日付けで、質問状が出された。ところが、カントリルの報告を受けて、パーマー委員長は、女性委員会のメンバーは、個人単位ではなく団体で構成していると、ブラウン会長に通達した。<sup>(26)</sup> 全米組織がないという理由での拒否に対し、黒人女性のショックは大きかったが、これが引金で、急速に全米組織設立へと向かう。<sup>(27)</sup> このことは他稿に譲りたい。

さらに、こういう経過の後で、万博の単なる雇用についても、男女を問わず黒人の雇用を拒否しやすい状況になった。万博運営に何百人もの事務職員が必要となるにも拘わらず、黒人男女の求職者については応募書類は丁寧に受理されながら、そのまま全て棚上げになっていた。唯一採用された黒人男性はジョンソン (J. E. Johnson) であった。シカゴ在住の黒人女性の採用については、九一年末まで議論され続け、やっと決定した著名な医師カーチスの妻 (A. M. Curtis) も、要職にはつけないで、単なる事務職であった。しかも僅か数カ月間のみの採用で、解雇された後、彼女は組織内の方針決定など重要事項からは黒人が排除されている現実を強調した。

彼女の後任は、ファニー・ウィリアムズだった。しかも、採用決定は万博開幕の僅か二カ月前であった。カーチスと異なり、積極的に黒人側からの不満や要求を、委託管理委員会 (the Board of Reference and Control) に提出したウィリアムズの努力の結果、合衆国の万博への関心を高めるために、宣伝促進部 (Department of Publicity and Promotion) で黒人男女の雇用が必要であることが、同委員会で決議された。但し、この決議は単なる決議のままで、実行に移されることはなかった。<sup>(28)</sup> 結局、万博の準備及び開催期間において、採用されたのは、これら三人の黒人だけであった。こうして女性館への参加も絶たれ、黒人女性の万博への関わりは消えたかに見えた。

## (2) 『黒人女性の知的向上』

宣伝促進部での仕事を受けたウィリアムズは、パーマー委員長のもとで、女性館の展示取り付けなどの援助をするようになった。但し、これはボランティアで無給だと知らされるが、黒人女性と万博との唯一の窓口だと悟り、彼女は仕事を続ける決心をする。同時に、講演の依頼を受け、黒人女性として公の場で話す機会を獲得する。女性館への参加だけで、あれだけの努力と議論の結果、拒否されたにも拘わらずこの依頼は意外である。

ウィリアムズは、自分だけの好機とせず、女性館主催の会議や講演会に、次々と黒人女性を推薦した。ワシントン D. C. 在住の校長で『南部からの声』(*A Voice from the South*, 1892)の著者クーパー (Anne Julia Cooper)、全国でも有数の雄弁な講演家のハーパー (Frances Ellen Watkins Harper) など、女性委員会が慎重に人選したはずの彼女達は、主催者の意図に反して、自分達黒人女性の現状や、万博から排除された事実について、滔々と話し続けた<sup>(29)</sup>。但し、本節では、ウィリアムズの講演に限って検討する。

万博開催中に、ウィリアムズは二回、講演の機会を得る。世界宗教会議 (The World's Congress of Religions) での「黒人にとっての宗教的義務」(“Religious Duty to the Negro”以下「宗教」と略記。)と、世界女性代表者会議 (World's Congress of Representative Women) における「奴隷解放宣言以後の合衆国黒人女性の知的向上」(“The Intellectual Progress of the Colored Women of the United States Since the Emancipation Proclamation”以下「女性」と略記。)であった。

まず「宗教」では、「黒人はキリスト教徒によって、キリスト教徒に使われるために、この国に連れて来られた。」とキリスト教の持つ二面性から、講演を始めた、さらに、奴隷制存続の道具として宗教を利用したことから、「聖書を拡大解釈してはいけない。」と断言した。宗教本来より、いわゆる教会活動が重視されている矛盾をつき、「理論は少なく、人間のつながりを多く」とか「雄弁よりも常識や真実への熱意を」と訴えた。

黒人にとって必要な宗教は、過去から依然と変わらず、人間らしい愛情、道徳的な方向付け、純粋な力だと述べた。宗教は

「人々を孤独に放り出してはいけない。週に一度や二度教会へ行くことで安心してはいけない。常にどの家の扉も開かれた状態で、宗教を必要とする人々を受け入れなければならない。」と結んだ。<sup>(30)</sup> 黒人を従属的な位置に押しとどめる道具として、白人が宗教を利用していると述べた。もはや行き詰まり状態の合衆国の宗教の現状を伝えて、宗教の本来の意味を聴衆に考えさせようとしているようだ。

「女性」の講演では「僅か三十年前には、私達黒人女性に関して進歩という言葉を使用するなど考えられず、例外的な存在として扱われてきた。」と切り出した。合衆国の様々なグループの中でも、黒人女性が一番忘れられた存在であると強調した。エマソン(Ralph Waldo Emerson)の「アメリカとは、言い換えれば機会のことだ。」という言葉引用して、アメリカ人は、無知と貧困には我慢できず、常に機会を求めて上昇志向で生きているはずが、黒人女性はその枠から外されていると述べた。

現在、黒人女性にとって必要なことは、団結して組織を作り、状況改善のための運動をすることだと訴えた。国家の発展の知的な力となり、貢献したいと黒人女性自身も願っている。黒人、白人と分かれずに同じ女性として協力していききたいとも提案した。<sup>(31)</sup> これまで、シカゴの黒人社会で生きながら、同時に白人エリート社会にも属し、すでに指摘したように、シカゴ図書委員会の最初の女性委員、シカゴ女性クラブ唯一の黒人女性など、先駆的な活動をするようになる女性ならではの発言がなされた。彼女自身、黒人であるために差別された経験のないまま、エリート社会で上昇志向で生きている女性としては、この発言は当然だったのかも知れない。

講演で黒人聴衆を勇気づけながらも、ウィリアムズは白人女性を前にして、問題の核心に触れる発言を、敢えてしなければならなかった。「残念なことだが、黒人女性の道德問題に触れなければならない。」と始め、彼女自身が、南部の学校で教職に就いた時に見聞きした経験から、黒人女性が道德的に非難されている事実を踏まえて「私達は自分達の名譽を自分達で守らなければならない不幸な立場にある……かつて奴隷であった女達が、二五年間<sup>(ママ)</sup>自分達の自由のために闘い続けている上に、さ

らに自分達の道徳的名譽を守ることが要求される<sup>(32)</sup>。と訴えた。

ウィリアムズは、後に黒人新聞への投稿記事の中で、この時の講演をさらに発展させた議論を展開させている。南部での強姦神話（本章第四節を参照）を取り上げ、犠牲はいつも白人女性と考えられてきたが、忘れられた存在の黒人女性は、奴隷制時代以来、現在も変わらず白人男性の犠牲になっていることを暴露した。白人の家庭に住み込みで娘を働きに出す南部の黒人の母達は、娘を守ってやることもできず、家庭内の白人女性は、さらに頼りにもならない状態にあると述べている。<sup>(33)</sup> ウィリアムズは、黒人女性は被害者ではあっても、責められることはない<sup>(34)</sup>と主張する。犠牲になる女性も悪いと言うような一般的な偏見をも、攻撃していると言っているように思う。

### （3）「黒人の日」とハイチ館

公式開催後、訪れた黒人達は「喉に腫れ物ができたような」拘りを感じていた。自分達の展示は会場内になく、わずかにニューヨークとフィラデルフィア（Philadelphia, Penn.）出身者の縫物や絵画の出品、黒人大学の宣伝のための一郭があった。ただ、彼らにとって唯一の慰めは、他国同様に合衆国政府から参加の招待を受け、出展したハイチ館（the Haitian Pavilion）とリベリア館（the Liberian Pavilion）だった。<sup>(35)</sup>

訪問者として、レストランや娯楽施設で差別を受けたかどうかについては、当時の黒人新聞の記事を検討したラドウィックらによれば、一例以外になかったようだ。唯一の例は、レキシントン（Lexington, Mass.）から来た黒人女性が、ケンタッキー館（the Kentucky Building）で、入館を拒否されたことである。他の南部諸州館でも、同様の黒人差別が行われたことだろうが、推測の域を出ず、新聞記事にはなっていないということだ。飲食店、公共の宿泊施設などでの差別例は新聞記事にならず、黒人達訪問者の不満の声は、万博の運営方法に集中して記事にされている。<sup>(36)</sup>

これらの不満や怒りの声に応じる企画として、万博委員会は、「黒人の日」（a Colored Jubilee Day; a Negro Day）を

設定した。しかし、黒人達の不満は頂点に達していたため、「黒人の日」の発想を、見下されお情けで設定された企画（“nigger day”）としか捉えられなかった。この企画の内容についてはダグラスに一任された。彼はハイチ公使の経験（八九年九月～九一年七月）があり、ハイチ政府代表としてハイチ館の運営に携わっていた。

「黒人の日」の企画をダグラスが承諾したことで、黒人知識人の間で議論が起こる。彼らにとって、この企画は決して望ましいものではなく、むしろ黒人には屈辱だと考えた。その先頭に立ったのはウェルズで、黒人新聞の編集者達も賛同した。全ての参加館が、それぞれ特別の企画日（its “day”）を設けていたが、参加館を持たない黒人が、特別企画だけ参加するのはおかしい、「合衆国白人の日」の企画がないのに、「合衆国黒人の日」があるのはどういふことか、などの疑問を掲載した黒人新聞もあった。<sup>(36)</sup>

九三年八月二五日の当日、ウェルズら、批判派の黒人は欠席した。企画の中心は、ダグラスの講演だったが、呼び物もいくつか準備された。新進の有望な詩人ダンバー（Paul Laurence Dunbar）による「黒人」（“The Colored American”）と題された詩の朗読<sup>(37)</sup>、コンサート歌手のバーレイ（Harry T. Burleigh）<sup>(38)</sup>、プラト（Madame Delseria Plato）によるコンサートであった。「黒人の日」の企画に批判的な新聞も、コンサートだけは絶賛した<sup>(38)</sup>。

ダグラスは講演の中で、万博開催を決して讃えることなく、むしろ非難して、いかに黒人が排除されたかを訴えた。「この国は、人口の十分の一の八百万人の存在を無視している。この国家建設の時に自らの労働を捧げ、共に努力してきた我々黒人は、今だに抑圧されている。」<sup>(39)</sup>

翌朝、新聞に掲載された講演記録を読んだウェルズは、黒人の合衆国への貢献を讃え、万博での排除を聴衆に示したその内容に深く感激した。そして自分自身の若さ故の軽率なダグラス批判を恥じ、すぐに謝りに出かけている。「黒人の日」の企画を受けたのは、五十年以上も黒人の権利獲得闘争を重ねてきた偉大な指導者の、賢明な選択であったことに気づいたのだ。「一片もないより、たとえ半分でもパンを手に入れる」<sup>(40)</sup>ことから始め、最終的に自分の目標達成により近づくという方法を、

学ぶのであった。

(4) 『黒人がコロンビア万博に参加していない理由』

黒人も黒人女性も万博参加を拒否された現実を、全世界からの万博参加者及び見学者に知らせるための方法を、フレデリック・ダグラスと相談したウェルズは、小冊子作成を決意する。全米の黒人新聞社経由で、一般の黒人から小冊子印刷のための寄付を集めるよう、各社に依頼する。外国からの訪問者のために、英、仏、独、西語に翻訳し、無料配布するという予定で、寄付の目標額は五千ドルに設定された。

しかし、依頼を受けた黒人編集者達の中でも賛否両論に分かれた。反対理由は、様々であった。万博開催に関連した差別に憤りを見せ、「合衆国のどのマイノリティもこのような小冊子を作成してはいない。作成することで、黒人差別を世界に知らせ、逆に黒人は世界の笑いにされないか。」との疑問を出し、『メソヂスト・ユニオン』(the Methodist Union)の編集者は、「我々は、合衆国市民としてシカゴへ行く。」と断言した。また、五千ドルもの寄付が集まるのなら、小冊子作成よりもっと賢明な使途、例えば孤児院建設などを考えた方がよい、という意見も出された。あるいは、日銭稼ぎをしている黒人達から、たとえ小銭でも寄付を集めることはできない、という意見も出た。<sup>(41)</sup>

資金調達の依頼から四ヵ月後、集めた寄付は「ほとんどないのと、かなり多いとの中間程度」で、英語での発行がやっとの状態で、無料配布は望めなかった。何千部もの小冊子が売られたが、多くはハイチ館の前に座って売り続けたウェルズの努力に負った。<sup>(42)</sup> 小冊子は『黒人がコロンビア万博に参加していない理由』(The Reason Why the Colored American Is Not in the World's Columbian Exposition)と題され、副題はウェルズによって「アメリカ文芸への黒人の貢献」と付された。<sup>(43)</sup> 本文は八一頁からなり、序文だけは仏、独、英語の三カ国語で書かれた。目次を列挙してみる。<sup>(44)</sup>



## 序文「真実の探求者達へ」（仏、独、英語）

## I 序章

フレデリック・ダグラス

## II 社会的地位を定めた法律

## III 囚人賃貸制度

## IV リンチ法

アイダ・B・ウエルズ

## V 奴隷解放後の黒人の進歩

ガーランド・ペン

## VI その理由

F・L・バーネット

ウエルズの夫となるバーネットによる第六章は、本章第一節で多く引用したように、黒人女性の女性館への参加が不可能になった過程を、詳細に説明した一次史料である。同時に、一八九〇年当時、合衆国人口の一二％近かった七五〇万人の黒人の存在を無視した、大統領を初めとする合衆国の姿勢に、怒りを表している。共同編集者ペン（I. Garland Penn）による第五章は、解放後の黒人の各界での活躍の紹介記事である。専門職、文学者、ジャーナリスト、聖職者、熟練工、発明の特許取得者、彫刻家、音楽家など、豊富な資料と統計を用いて、各界に進出した黒人達の業績が紹介されている。

本節では、本稿の目的に即し、第四章でのウエルズの主張を検討するにとどめたい。反リンチ運動家としての活動を、生涯の仕事と定め、この万博をはさんで、九二年と九四年の二度に渡りイギリスへも講演旅行に出かけているウエルズは、小冊子執筆でこれまでの活動を公に知らせることになる。

無法時代に行われていた私刑（リンチ）が、再建終了後の南部で、黒人に対し行われている現状を暴露している。リンチ件数、被害者数、実際のリンチ例の詳細な説明など、南部の現実を知らない人々への告発がなされている。リンチの原因とされた強姦神話（黒人男性が白人女性を強姦したと信じられている神話）を、彼女の現地調査によれば事実無根である場合がほと

んどであったと、当時の南部ではタブーとされた神話打破に挑戦している。

最も衝撃的な部分は、リンチされ木に吊され死亡した黒人男性の写真である。回りには、リンチの見物人の老若男女の白人達が見える。しかもこの写真は、リンチにかけた白人暴徒の一人が、黒人の状況改善のために尽力しているニューヨーク在住の白人判事トルギー (Albion W. Tourgee) 宛て、送ったものである。写真の裏には、年月日と場所、リンチの理由が書かれてある。九一年八月二日、アラバマ州クラントン (Clanton, Ala.) で起こったリンチの被害者は、白人女性を強姦したと噂された<sup>(45)</sup>。事実の真偽は問題ではなく、噂だけで、当時の南部では十分罪深いとされた。

再建期に選挙権を得、投票に行こうとする黒人達が、KKK (Ku Klux Klan) によるリンチの対象になったことと比較して、ほとんど同じことをされると述べながら、KKKとリンチ暴徒との著しい相違点を挙げている。KKKが白い頭巾を被り、夜の暗闇で行うのに比べて、暴徒はリンチを予告して、白昼堂々で行う。実際、リンチが予告された場合、休校にして、小学生達を担任が引率して、黒人リンチの見学に來たなどという、テキサス州の例があるくらいだ<sup>(46)</sup>。

こうしたリンチの例を挙げることが小冊子作成の目的ではなく、彼女が呼びかけたかったことは、リンチ撲滅の方策である。南部で、無法状態で行われていることに対し、法律を強化することは急務だが、白人、黒人を問わず全ての人が法のもとに公正な裁きを受けられるための法律を強化しようとする一般の人々の意向こそが必要であると、章末で訴えている<sup>(47)</sup>。

ウェルズ自身が「孤独な」反リンチ運動を繰り返しながらも、一向に衰えない南部での黒人リンチに対し、小冊子を一冊でも多く配布することで、事実を一人でも多くの人に伝え、草の根レベルでリンチ反対の気運を盛り上げたいという、ウェルズの熱意が文面に読み取れる。

#### 四 おわりに

シカゴ万博(一八九三)に関わった黒人女性の中から、二人を選択して、各々の立場を検討することによって、一九世紀末

の黒人女性の状況を考察することが、本稿の目的であった。

ウェルズとウィリアムズという、同時代のシカゴで、共に黒人の権利獲得のために活躍した黒人女性が、その生い立ちや生活環境によって、異なった手段を用いて、運動を行っていたことは、すでに検討の通りである。ウェルズは、黒人の人間としての権利、リンチの被害からの防御、生命の保護などに活動の重点を置いた。ウィリアムズは、女性としての名誉回復、北部の黒人女性による南部の黒人女性の身体的保護、黒人女性の雇用獲得と知的活動への参加、白人女性との共闘による権利獲得などに焦点を当てた。

彼女達の主張の中で、共通して利用したのは南部における「強姦神話」であった。同じ神話打破を試みても、その着眼点は異なっていた。ウェルズは、黒人男性と白人女性の場合に着目し、南部のタブーへの挑戦を試みた。<sup>(48)</sup>ウィリアムズは、黒人女性と白人男性の場合に着目した。前者は大半がでっち上げで、白人女性が被害者という例はごく稀であったことは、ウェルズの調査で明白だった。しかし後者は、黒人女性は必ず犠牲者となり、誰からの救いもなかった。<sup>(49)</sup>

南部のタブーへ挑戦したウェルズは、常に自分の身の危険と背中合わせで、「ピストルを携帯したジャーナリスト」であり続けた。一方、ウィリアムズは、白人女性に向かって、彼女達の夫の非を公表することを試みはしたが、自分自身の人種と性への名誉回復が大きな目標であったことには変わりない。南部の白人男性に直接訴えるという方法を取らなかったことで、迂回的な差別撤廃運動に留まったことも事実だ。女性の立場に拘ったがために、より大きな問題である人種差別のための活動展開が弱ったという面もある。彼女の発想は、北部に住む「伝統的な黒人エリート<sup>(50)</sup>の発想」を越えたものでは決してなかった。

しかし、両者とも、黒人差別に伴う精神的、肉体的被害の防止を活動の第一目的とした点で、共通していることは確かである。直接行動を起こし、問題の核心に体当りしたウェルズを「急進派」と言うならば、ウィリアムズは「穏健派」とも言えるだろう。シカゴ万博に参加できなかったという事実を出発点に、ウィリアムズは、小さなチャンスを最大限に生かし、たとえば聴衆が白人女性に限定されたとしても、黒人女性の立場を明確にした効果は大きかったはずである。

奴隷の子として南部に生まれたウエルズは、常に下層階級で生活に苦しみ、リンチの危険におびえる黒人達を見つめ続けた。彼女は、生涯こうした黒人達のために、反リンチ運動やセシルメント活動を行っていった。晩年にあっても、現場の調査を続けた黒人女性であった。自由黒人の子として北部に生まれたウィリアムズは、南部で教職に就くまで、ウエルズが見つめ続けたような黒人の存在、あるいは差別の状態を知らなかった。彼女は、彼女なりの活動で、女性としての権利獲得に尽力した。知識階級の、時として白人社会でも生きた彼女は、黒人女性としての自分自身を最大限に成長させた女性であった。

シカゴ万博において、満場の聴衆の前で女性の結束を説き、黒人女性の汚名返上と名誉回復のための講演をしたウィリアムズと、無料配布が不可能となり、手作りの小冊子を、見学者として会場に入り、ハイチ館の前に座り込んで売り続けたウエルズと、一九世紀末を生きた黒人女性二人の生涯を象徴しているような光景であると言えるだろう。

## 注

(1) 大島良行『アメリカン・ホリデー―その神話と現実―』東京書籍、一九八七、一六八―一八八頁。同書ではこの祝日の起源を一七九三年の三〇〇年祭に置いている。主催団体のタマニー・ソサイエティの構成メンバーのほとんどがカトリック教徒であったことが、コンブスとの共通点だとする。現在でもニューヨークでは、イタリア系移民を中心に大パレードがあったり、ロサンゼルスでは、イタリア系のスターがイタリア国旗を掲揚したりする。

(2) フィリップ・ジャカン著、富田虎男監修『アメリカ・インディアン―奪われた大地―』創元社、一九九二、一―四頁（日本語版監修者序文）。

(3) 日本のアメリカ研究者によるシカゴ万博を対象とした論考には、次のようなものがある。しかし共に歴史学分野外の論考と言える。奥出直人『一八九三年シカゴ博のミッドウェイ―ファーストフード・レストランのデザインの文化史的起源―』、『アメリカ研究』、第二二号、一九八八、八九―一一二頁。能登路雅子「フェリス観覧車と鳳凰殿――一八九三年シカゴ博覧会に見る日米のナショナルリズム――」本間、亀井、新川編『現代アメリカ像の再構築』東京大学出版会、一九九〇、一二三―一三九頁。また日本の黒人史研究家で、シカゴを研究対象とした業績には、次に代表される一連の竹中氏の研究がある。本稿執筆にあたっても、多くのご指導を頂いた。ここに深く感謝を表したい。竹中興慈「黒人政治の境界性――世紀転換期から一九三〇年代半ばのシカゴ黒人ゲート――」、『北九州大学外

国語学部紀要』第七三号、一九九一年一月、二二一七六頁。

- (4) E. M. Rudwick & A. Meier, "Black Man in the 'White City': Negroes and Columbian Exposition, 1893". *Phylon*. (26. Winter 1965), 354-361. 合衆国のアメリカ文化研究者によるシカゴ万博を対象とした論考には次がある。Justus D. Doenecke "Myths, Machines and Markets: The Columbian Exposition of 1893," *Journal of Popular Culture*, vol. 6, 1972, pp. 535-549; Robert W. Rydell, "The World's Columbian Exposition of 1893: Racist Underpinnings of a Utopian Artifact," *Journal of American Culture*, vol. 1, 1978, pp. 253-275.

- (5) Ann Massa, "Black Women in the 'White City'", *Journal of American Studies*, (8, Dec. 1974), 319-337.

- (6) 国内外のウェルズに関する研究状況及び黒人女性史研究の現状に関しては、拙稿「反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ」立教大学史学会『史苑』第五一卷第一号、九一年一月、二四―四一頁を参照されたい。同時期に次のウェルズ研究も発表された。落合明子「アイダ・B・ウェルズと世紀転換期における反リンチ運動の展開——特にアジテーターとしての地位を確立する初期の活動を中心に——」筑波大学『史境』第二三号、九一年一〇月、一一―一八頁。

- (7) "Chicago fair marks 1492 discovery, Chicago, Oct. 23, 1892", *Chronicle of America*, (Longman, Chronicle, Mount Kisco, N. Y., 1989. p. 496.

- (8) "Columbian Exposition: Opening Day Again, Chicago, May 1893", *Ibid.*, p. 499.

- (9) "Fire destroys exposition, Chicago, Jan. 8, 1894", *Ibid.*, p. 502; Allan H. Spear, *Black Chicago: the Making of a Negro Ghetto, 1890-1920*, (Chicago and London, University of Chicago Press, 1967), pp. 2-3.

- (10) E. M. Rudwick & A. Meier, "Black Man", 354.

- (11) *Ibid.*, 354.

- (12) *Ibid.*, 355; Ann Massa, "Black Women", 320.

- (13) 二〇世紀転換期の黒人女性の活躍については、拙稿"Black Women in American History: The Significance of the Turn of the 20th Century"浦和短期大学紀要『浦和論叢』第七号、九一年九月、六一―七六頁を参照されたい。

- (14) Edward James, ed., *Notable American Women: 1607-1950, A Biographical Dictionary vol. III*, (Cambridge, Mass., the Belknap Press, 1971), p. 620.

- (15) F. B. Williams, "A Northern Negro's Autobiography", *Independent*, July 14. 1904, 91-92.; James, ed., *Notable American*

*Women*, p. 621.

- (16) 詳細は、前掲の拙稿「反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ」を参照されたい。同稿ではシカゴ万博までのウェルズの半生を考察している。

(17) Ida B. Wells, *Crusade for Justice: The Autobiography of Ida B. Wells*, edited by Alfred M. Duster, (Chicago, University of Chicago Press, 1970), pp. xxiii-xxiv, 239-241. ウェルズの未婚が編集した未完の自伝である。以下 Wells, *Crusade*, を略記する。ウェルズは結婚を機に、旧姓を残して名前を Ida B. Wells-Barnett と変えている。本稿では、結婚前の時期の検討と云うことで、ウェルズを使用する。

- (18) Spear, *op.cit.*, pp. 66-67; James, ed., *Notable American Women*, p. 621.

(19) *Ibid.*, pp.59-60, 67; Wells, *Crusade*. pp. 264-265.; Louis R. Harlan, ed., *The Booker T. Washington Papers vol. 5*, (Urbana, Univ. of Ill. Press, 1976), pp. 588-589., Wells, "Booker T. Washington and His Critics", reprinted in Mildred I. Thompson, *Ida B. Wells-Barnett: An Exploratory Study of an American Black Woman, 1893-1930*, (Brooklyn, New York, Carlson Publishing Inc., 1990) 同書は *Black Women in United States History Series* 全十六巻中の第一五巻である。ウェルズの一次史料収録以外は、ノンペーンの同論題の Ph. D. 論文(一九七九)の再録である。

- (20) Massa, "Black Man", 320.; James, ed., *Notable American Women vol. II*, p. 421-422.

- (21) Rudwick & Meier, "Black Man" 355; Massa, "Black Women", 328-329.

(22) F. L. Barnett, "THE REASON WHY", in Wells, F. Douglass, I. G. Penn & F. L. Barnett, *The Reason Why the Colored American is Not in the World's Columbian Exposition*, (Chicago, Ida B. Wells, 1893), p. 67.

- (23) Massa, "Black Women", 322.

(24) Dorothy Salem, *To Better Our World, Black Women in Organized Reform, 1890-1920*, (Brooklyn, New York, Carlson Publishing Inc., 1990, *Black Women in United States History Series*, vol. 14). pp. 16-18.; Charles Harris Wesley, *The History of the National Association of Colored Women's Clubs, Inc.: A Legacy of Service*, (Washington D. C.: National Association of Colored Women's Clubs. 1984) p. 27.

- (25) Massa, "Black Women", 323.

- (26) *Ibid.*, 324-325.; Wesley, *The History*, pp. 27-28.; *The Reason Why*. pp. 69-72.

- (27) Tula Kay Hamilton, "The National Association of Colored Women, 1896-1920," Ph. D. dissertation, Emory University, 1978, pp. 19-20.; Wesley, *The History*, p. 28.; 最初の全国規模の組織「全米黒人女性協会」(The National Association of Colored Women's Clubs) の活動に関する論著として、拙稿「LIFTING AS WE CLIMB: Goals and Activities of the NACW Club (1896-1992)」浦和短期大学紀要『浦和論叢』第九号、九二年九月、五九—八一頁を参照されたい。
- (28) *The Reason Why*, pp. 74-76.
- (29) Massa, "Black Women", 334-335.: ハーパーの講演記録は次に収録されている。Frances Ellen Watkins Harper, address, "Woman's Political Future," World's Congress of Representative Women, ed., May Wright Sewall (Chicago, 1893), pp. 433-37. in Bert Loewenberg and Ruth Bogin, eds., *Black Women in Nineteenth Century American Life*, (University Park; Penn. State Univ., 1976, pp. 244-251.
- (30) Fannie B. Williams, address, "Religious Duty to the Negro", World's Parliament of Religions, Chicago, 1893. The World's Congress of Religions, (Chicago, 1894), pp. 893-97. in Bert Loewenberg and Ruth Bogin, eds., *Black Women* pp. 265-270.
- (31) —, address, "The "Intellectual Progress of the Colored Women of the United States Since the Emancipation Proclamation" World's Congress of Representative Women, ed., May Wright Sewall (Chicago, 1893), pp. 433-37 in Loewenberg and Bogin, eds., *Black Women*. pp. 270-273.
- (32) *Ibid.*, 274.
- (33) Williams, "A Northern Negro's Autobiography", 96 partly quoted in Gerda Lerner, ed., *Black Women in White America: A Documentary History*, (New York, Pantheon Books, 1972), pp. 164-165.
- (34) Rudwick & Meier, "Black Man", 359.
- (35) *Ibid.*, 357.
- (36) *Ibid.*, 359-360.; Wells, *Crusade*, p. 118.
- (37) Wells, *Crusade*, pp. 117-118. ダンバーは「高校を卒業したばかりで、自分の書いた処女詩集『オークとシタ』(*Oak and Ivy*)を持って万博に来了。しかし、万博開催中に自分の詩集を売りきれず、また自分の詩への十分な評価も得られなかったと落胆し、最終日に「ウェルズの所へ来て「自分の実力のなさがよくわかったので、これからデイトン (Dayton) へ帰って、またエレベーター・ボーイ

をします。」と言が残した。数ヵ月後、この新人の詩集がアメリカ文学界の長老ハウエルズ (William Dean Howells) によって『アトランティック・マンスリー』(the *Atlantic Monthly*) 誌上で評価されたことを、ダンバーは知らない。

(38) Rudwick & Meier, "Black Man", 361.

(39) *Ibid.*

(40) Wells. *Crusade*, pp. 118-119.

(41) Rudwick & Meier, "Black Man", 356.

(42) *Ibid.*, 356-357.

(43) 現存する小冊子には、五年後の九八年八月三〇日の日付で「二万部のコピーが用意されているので、希望者は三セントの郵送料を同封の上、アイダ・B・ウエルズの自宅宛て申し込んでほしい。」とある。シカゴ万博の残部を配布し続けていたようだ。現在、この小冊子は、合衆国内でも入手困難である。筆者所有のコピーは、白人女性歴史家で黒人女性史に多くの貢献をしているベティナ・アプシカー氏が大英博物館でコピーなさったものを、ご好意で郵送下されたものである。前掲の Thompson, *Ida B. Wells-Barnett* の史料収録の部分に、第四章と第六章だけは収録されている。

(44) 序文の要約と序章の内容については、前掲の拙稿「反リンチ運動家アイダ・B・ウエルズ」三九頁を参照されたい。

(45) *The Reason Why*, pp. 34, 35-36.

(46) *Ibid.*, p. 39.; Wells, *Crusade*, pp. 84-85.

(47) *Ibid.*, p. 39.

(48) ウエルズの強姦神話打破の詳細な経過については、前掲の拙稿「反リンチ運動家アイダ・B・ウエルズ」三三―三六頁を参照されたい。

(49) Wells, *Crusade*, p. 70. ウエルズは、南部の黒人女性についても着目して、次のように述べている。「奴隸制時代から、白人男性は当然のように黒人女性を強姦してきた。現在もそれは続いているが、黒人であるために教会も州も新聞も取り上げることもしない。」(前掲三五頁。)

(50) Spear, *op. it.*, p. 69.

Special thanks to Bettina Aptheker for giving me access to very hard-to-get and important primary sources, the copy of the pamphlet, *The Reason Why the Colored American is Not in the World's Columbian Exposition*.